

## 高齢者の眼の病気（5）

加齢黄斑変性にはいくつかのタイプがあることがあることはお話ししました。この中でもっとも日本人に頻度が高いものがポリープ様脈絡膜血管症（以下 PCV）です。ポリープというと胃や腸の良性腫瘍を連想する方が多いと思いますが、PCV は網膜の後ろの脈絡膜という組織の血管がまるでコブのように腫れ上がる病気です。

脈絡膜は耳慣れない言葉ですが実は眼にとっても極めて重要な組織です。この組織は心臓から拍出される動脈の血を直接受け止めています。つまり眼の栄養を補給路と考えられます。脈絡膜は単位重量あたりの血流がもっとも多い組織であり、ちょうど栄養分に満ちたスポンジのようなものと考えていただければいいと思います。この中の血管がポリープのように膨れ上がるわけです。

診断をつけるためには特殊な造影剤を使った検査が必要です。インドシアニングリーンという緑色の色素を静脈内から注射し、眼にくる造影剤を撮影します。特殊な励起光とそれを撮影するためのフィルターが必要になります。まれに造影剤によるアレルギーを起こす方がいますが、重篤な合併症が発生することは極めてまれです。

患者さんは中心がみづらい、真ん中が暗く見える、またはものがゆがんでみえる、といった眼科を受診されます。このほか、現在では光干渉断層撮影（通称 OCT）という検査法で黄斑部の腫れの程度を評価することが一般的です。現在の最新鋭の検査機器を用いると約 5 ミクロン程度までの微細な構造物が観察できます。

したがって、加齢黄斑変性の疑いといわれたらまずこのような検査で、病変の詳細な評価を行うわけです。この段階で視力が良好な場合には、主治医から『様子をみましょう』と経過観察をすすめられることも多いです。

血圧の高いかたは要注意です。突然血管のこぶが破裂し、網膜の下に大出血を起こすことがあります。この場合は程度が強い場合には眼球全体が出血の塊のような状態になり硝子体手術という治療で出血を取り除く必要があります。

PCV は日本人にとっても多い疾患でありながらその原因がまだわかっていません。両目にくることも多く、また有色人種に多いことから遺伝的素因が関わることが推測されています。また中年男性に多い中心性しょう液性網脈絡膜症（CSC）という病気があります。CSC は通常あまり重篤な視力をこないのですが、この CSC という病気が再発を繰り返す患者さんがいらっしゃいます。その慢性型の CSC からこのポリープ状の病変が発生することが知られています。